

本に託す記憶・心

沖縄戦に巻き込まれていく子どもたち

「ちーちゃんの沖縄戦」 親里千津子著

二ライ社刊 1200円



A Child in the War

A book review by Matsukawa junior High ALT

Tammy Crichton.

Usually, when we read about wars, we read about them in textbooks and history books. We learn numbers: dates of attacks, how many people died. We don't usually have a chance to hear about the war experience of ordinary people. That is why Chizuko Oyasato's book is very important. It gives us a chance to see war from the eyes of a child.

When I read Ms. Oyasato's book, I could almost smell the burning buildings. I could almost hear the bombs raining down. I could almost see hundreds of ships on the sea. She tells us that her mother and grandfather died in front of her eyes. When I read these words, I was sad and amazed. War is a terrible thing. My grandfather was a prisoner of war in Japan at the same time that Ms. Oyasato was in Okinawa. I think it's very important for us to know what happened during the war. We all know that war is bad. But it's hard to understand just how bad. This book helps us to understand. When we listen to people like her or my grandfather, it has impact. Ms. Oyasato tells us to be kind to other people. She tells us not to have mukanshin. I think my grandfather would say the same. I will remember Ms. Oyasato's words and her story.

今も戦闘機の音で子供たちは騒音に悩まされ、近隣の住民も同じく悩まされています。住宅地にも実弾演習の流れ弾が飛んできたりもしました。

戦争で死んでいった人たちの声を無視する人たちのような現状。「どんな理由があろうと戦争をしてはならない」。何人の人がこの言葉を唱えてきたでしょう。

ちーちゃん(親里千津子)は戦争当時小学生でした。毎日、戦争

のため陣地作りを手伝わされました。

ある日、友達と歩いているとき、空が気になりました。ふと、空を見るときも通りジエット機が飛んでいました。突然「逃げろ!。空襲だ!」。

私達にはとても考えられない生活をしてきた親里さん。二度と戦争を起こさないように、生きて欲しいという願いを込めて書いた本です。



「6月の空」 ハーフセンチュリー宮森・文、磯崎主佳・絵

なんよう文庫刊 1600円

50年前の悲劇を風化させないで

この本には、木の樹 落事故の犠牲となった液や米軍ジェット機墜 宮森小学校の土の絵具

と混ぜて描いた部分があります。付属のCDには遺族が50年間にえなかつた想いも収録されています。「絵本にすれば子供から大人までたくさんの人に読んでもらえる。日本語版と英語版にすれば、日本人だけでなく、外国人にも読んでもらえる。たくさんの人に悲しい事実を知ってもらいたい」とハーフセンチュリー宮森の代表宜野座映子さん。そんな思いで作成した一冊が「6月の空」です。



「潮だまりの魚たち」 宮城 恒彦著

慶良間諸島の記憶

米軍が慶良間諸島に、上陸した時から始まった沖縄戦。米軍の艦載機による弾丸の嵐によってたくさん犠牲者が出ました。この本は、著者宮城恒彦さん

この本の第一部の主人公、宮城恒彦さんは沖縄県座間味島に生まれました。しかし、昭和20年3月23日から25日までの3日間の空襲によって村や山が燃え、山全体が火の海になりました。その後の艦砲射撃や米軍の上陸により、村の人々はこのままでは捕まり虐殺されてしまうと思い、手榴弾で集団自決することになりました。このほかの話も沖縄戦の真相や悲惨な実態がわかりが伝わってくる作品です。



「花に逢はん」 伊波敏男著 人文書館刊 2940円

ひとに出会い、支えられ、ひとを支える

ハンセン病はかつてライ病と呼ばれ、感染力は弱く、完治する病気で、皮膚や神経などに後遺症が残ることもあり、外見から判断されて、患者は長く差別を受けてきました。たかが分かります。

一番印象に残ったことは、ハンセン病の療養所に強制隔離された伊波さんが、親戚に害が及ばないように名前を変えられたところだ。そこまでする必要があったのでしょ



「報道カメラマン 石川文洋写真集 戦争と平和第一巻 沖縄 わが故郷」 石川文洋著 株式会社ルック刊 2200円

写真が語る沖縄

報道カメラマン、石川文洋さんが、沖縄の戦後を写真で訴えま

つて65年たった今でも沖縄の地にあり続ける米軍基地。沖縄の至る場所に基地移設反対などの看板や大きな旗に自分たちの思いを書き、必死に訴える人々の写真。その中にある思いは、悲しい、苦しい、悔しいなどの一言では伝えられない、とても重いものです。生きていくうちに基地のない沖縄を見た。この本は、長野県に住む私たちに想像できないことを伝えていく本です。